vol. 4
Sep.2017
市史編さん広報紙

たちかわ物語

TA CHI KA WA MO NO GA TA RI

砂川・五日市街道の航空写真 昭和31(1956)年1月6日　歴史民俗資料館所蔵

立川市の北半分、砂川という地域の名前は、市内を流れる残堀川に由来していると言われています。かつての残堀川は大雨が降ると氾濫することもありましたが、普段は砂と石がむき出しの「砂の川」であることがほとんどでした。江戸時代の初め、砂川の新田開発は、この残堀川に沿って進められました。

その後、人工の川・玉川上水が整備され、五日市街道に並行して流れる砂川分水が開通すると、砂川の開発も本格化します。最初の開発は現在の武蔵村山市域から南へ向かって進められました。移り住む人々が増え始めると、五日市街道に沿った土地が順に振り分けられるようになり、次第に集落は東西に長く成長していきます。このようにしてできた横に細長くのびた村を、地元の方は「二里八町・長新田」と呼んでいました。

今号は砂川にスポットを当て、今に残る砂川の地名と、砂川の小学校開設の歴史（部会特集）について紹介します。砂川について新しい発見や違った側面を知るきっかけになればと思います。

目次

・新しい市史の編さんによせて …… 2
・第2期・立川市史編さん委員会委員 …… 2
・部会短信 …… 3
・砂川めぐり～名前でたどる歴史 …… 4～5
・部会特集（近代部会）
　砂川村の小学校
　～高等小学校開設まで …… 6～7
・「立川の史料を読む会」活動紹介 …… 8～10
＊連載＊　立川写真館「ふつうのすながわ」 …… 12
・平成29年4月～9月活動報告 …… 11
・資料提供のお願い …… 11

新しい市史の編さんによせて

第１期（平成27年９月１日から平成29年８月31日まで）の立川市史編さん委員として参加いただいた星由紀さんに、ご自身がこれまで活動されてきた経験を通して、市史編さんに寄せる思いをうかがいました。

市民の学びや活動と共に　（星　由紀　前・編さん委員）

この度「新しい市史」について、一人の市民として考える機会をいただきました。そうした中で、昭和30年代の立川駅前の写真に幼い頃の記憶を重ね、向郷遺跡には発掘に参加した20年前を思い出しました。

市の生涯学習の場などに参加して数年が経った今、印象深く思うことがあります。市民となってからの年月に関わらず、縁あって立川市に集う多くの皆さんの学びへの意識が大変高いということです。殊に立川市の歴史や物事の成り立ちを考え踏まえた活動を行う場合は、折々に「郷土への理解や愛情を深めながら、まちづくりや市民生活を考える」ことも合わせて問われているように思います。

市民企画講座では文化財の保存修復について学びました。特に、東京国立博物館が東日本大震災後から行っている被災文化財レスキュー活動には、被災文化財を再生させることが住民の心を守り、被災地の真の復興にも繋がることを痛感しました。同時に、立川市の文化財への思いを新たにしました。

前回の市史編さん時同様に、きっと今回も多大の資料が提供されることでしょう。未来に向け、それらが貴重な地域の財産として滞ることなく整えられていくことが望まれます。これからも市民の歴史は積み重なっていきます。資料の保存・活用のしくみを考えていくこともとても大事なことだと思います。

新しい市史がさらに身近で市民の学びや活動に寄り添い、支えとなることを期待します。

第２期・立川市史編さん委員会委員

立川市史編さん委員会は、市長の諮問機関として設置され、市史編さんに関する基本的な事項について審議します。このたび、第２期の立川市史編さん委員会が始まりました。任期は平成29年９月１日から２年間です。

職　名	氏　名	所　属　等
委員長	白井　哲哉	筑波大学図書館情報メディア系教授
副委員長	楢崎　茂彌	多摩戦時下資料研究会
委　員	大友　一雄	国文学研究資料館教授
委　員	小坂　克信	公募による市民
委　員	杉山　章子	公募による市民
委　員	鈴木　　功	前立川市文化財保護審議会会長
委　員	豊泉　喜一	立川市文化財保護審議会会長
委　員	保坂　一房	たましん地域文化財団歴史資料室長
委　員	和田　　哲	立川市文化財保護審議会委員

（敬称略・委員は50音順）

部会短信（平成29(2017)年度前期）

先史部会

昨年度に引き続き、向郷遺跡出土の竹内氏寄贈資料を整理しています。①実測図のデジタルトレース、②土器の材料の採取地や製作地を推定する胎土分析、③土器の胎土に残された種子の痕跡の分析、を中心に作業を進めています。また、大和田遺跡第1次・第3次・第4次地点出土資料の整理と、古墳とされる塚の測量調査も始めました。さらに、市民の方が所蔵されている石器や土器片の調査も始めています。かつて敷地や畑で石器や土器片を拾ったことがあるなどの情報をお持ちでしたら、市史編さん担当までお寄せいただければと思います。

古代・中世部会

昨年度から継続して中世武士立川氏に関する史料収集を進めています。立川氏は武蔵七党のひとつ西党に属していることから、他氏との婚姻関係も含め多摩郡の武士団にまで広げて調べています。春には普済寺の歴代住職である開山物外可什禅師、二世蔵海性珍和尚、三世道庵啓端和尚、四世桃源宗悟和尚にゆかりのある市内外の寺社にて史料調査を実施しました。その際、江戸時代初期に作成された古文書や位牌などを確認することができました。また、市内には鎌倉～室町時代に作られた石造物が残されており、今回は個人宅で保管されている板碑の調査を行うことができました。

近世部会

今年度より市内を砂川地区と柴崎地区に分けてそれぞれのお宅を回り資料の所在を確認していく調査をスタートさせました。現在のところ10軒の調査を終えました。今後も引き続き資料の所在発見に努めたいと思います。なお、所在調査を行う過程で、錦町の民家に残る資料の蔵出し作業を行うことができました。受け入れた資料は、現在事務局で整理作業を行っています。部会では、所在調査と並行して調査報告書（文書目録）の刊行準備を進めています。来年3月の刊行をめざし、担当者一同鋭意作業中です。

近代部会

5月より立川市の永年保存文書となっている歴史的公文書の撮影作業を開始し、主な史料の撮影を7月までに終えました。立川市歴史民俗資料館が所蔵する昭和20（1945）年までの立川村役場文書・立川市役所文書については、業者委託による撮影作業を進めています。これまでに約半分を終えていた砂川村役場文書のマイクロフィルムのデジタル化も、秋には完了します。新しい市史の骨格をつくる歴史的公文書の閲覧体制がようやく整い始めました。これらのデジタル化作業とあわせて、『資料編・近代編②』（平成32(2020)年度刊行予定）への掲載史料選定に取り組んでいます。

現代部会

昭和20（1945）年の終戦から昭和38（1963）年の立川・砂川合併までを扱う『資料編・現代編①』（平成31（2019）年度末予定）の刊行に向け、砂川村役場文書・立川市役所文書の調査・撮影作業を進める一方、外交史料館・国会図書館などで、米軍立川基地関係の資料調査を行っています。

上記の調査と並行して、立川のまちづくりについて関係者からの聞き取りを行い、公文書などの文字資料では分からない、当事者の実感に触れることができました。また、4月29日には、西砂川～砂川地区の巡見を行い、その際立川市が戦後制作した広報映画を鑑賞しました。

民俗・地誌部会

5月の末に座談会を開き、柴崎町1丁目で横町・出口地域を中心とする方々から、行事や暮らしのお話をうかがうことができました。自然環境・景観の調査では、屋敷林のあるお宅を訪問して、暮らしの中での植物との関わりについてお話をうかがいました。また、諏訪神社例大祭、阿豆佐味天神社の祭礼に加え、獅子舞やお囃子についても調査を行っています。その他の個別テーマの調査も並行して進めています。

民俗調査の過程では、古文書、写真、道具等の貴重な資料を多数確認でき、拝借、複写等をさせていただく例も少なくありませんでした。ご協力くださった方々に厚く御礼申し上げます。

砂川めぐり 名前でたどる歴史

立川市・砂川<すながわ>

現在の立川市がどうやって成立したか、みなさんはご存じですか？
昭和38（1963）年、立川市（旧柴崎村、立川市域の南半分）と砂川町（旧砂川村、立川市域の北半分）が合併したことで現在の立川市となりました。立川市は、二つの自治体が合わさってできた市なのです。

今回は砂川町にスポットを当ててみたいと思います。

砂川の成り立ち

砂川の誕生は江戸時代までさかのぼります。江戸時代初期、江戸城改修と町の拡大のため、現在の多摩地域から資材や燃料を調達する街道のひとつとして五日市街道が整備されました。しかし、砂川をはじめとする、武蔵野台地の地域は火山灰質の土壌に覆われ土地は田畑として運用しづらく、水源にも恵まれなかったため、開発はほぼ手付かずでした。

そのような環境の中で、「砂川三番」辺りに砂川で最も古い井戸（まいまいず井戸と呼ばれる様式の井戸）のひとつが掘られました。次第にこの辺りに人々が住みつくようになり、砂川の新田開発が進んでゆきます。江戸の水の確保のために人工の川・玉川上水が整備され、その後五日市街道に並行して流れる砂川分水が作られると、砂川の開発も本格化しました。

凡例

- 主要な建物
- 多摩モノレール駅
- 西武線駅
- 交差点標識設置場所
- バス停留所
- 公園・その他
- 橋

・この地図は最新版の立川市役所発行『立川市市民マップ』と立川市教育委員会発行『立川を歩く』を元に作成した地図です。表記されている道路名は現在使われているもので、砂川の昔の地域の呼び名に関連・由来するものです。
・地図上に配置された写真は砂川でかつて使われていた地域の呼び名が現在でも確認出来る標識やバス停です。今でも通称として親しまれていたり、公園名や団地名としても使用されています。

過去と現在をつなぐ「道」

土地の名前は、その地域の特徴を反映して名付けられたものや、開拓を指導した人物、その出身地から付けられたものなど、成立の由来はさまざまです。

道の名前も行先の地名が道路名になることが多いですが、土地の名前がそのまま使われる場合や、神社・寺院への参拝や観光に行くための道であったことを示す場合もあります。

土地の名前や道の名前は、時代によって呼び名が変わったり、同じ場所でも違う土地の人々からは別の名前で呼ばれることもあり、その変遷を詳細に示すには多くの情報が必要になります。また、名前の由来がさまざまであるのと同様に、名前が使われなくなった理由もさまざまです。それらをつなぎ合わせることで、砂川の歴史をより深く知ることができるでしょう。

砂川の歴史の足跡を探して

「砂川○番」という呼び名は村や市が出来るより以前の「組」という地域の共同体からきています。かつて砂川では一番組から十番組までの組が存在し、通称としても長く使われてきました。各組ごとに地域の道路や水路の管理、住民全体で行う行事や農作業のとりまとめが行われてきましたが、合併後の町名地番整理により、その後は新しい町名が使われるようになりました。

今回の特集では、交差点の標識や道路の名前として今でも存在が確認出来る砂川の昔の地域名をまとめました。普段何気なく見ている名称から、昔の砂川を知る手がかりが得られます。

玉川上水と五日市街道が交わる「天王橋」

町と人をつなぐ「橋」

道と道が交わるところに交差点ができるように、川と道が交わるところに橋は架けられます。玉川上水に架けられた橋で、昔からあるものは名前が変化したものもあります。その中でも特に重要なふたつの橋をご紹介します。

一番町にある「天王橋」は、砂川に古くからある橋のひとつです。南側にあった天王社が名前の由来とされ、かつては玉川上水を横断する街道の名前から「五日市橋」とも呼ばれていました。交通の要所として使われ、現在の天王橋交差点の交通量を見ても人が行き交う当時の様子がうかがえます。

砂川町三丁目の「金比羅橋」も村山（所沢）方面へ渡る村山街道と玉川上水が交差する場所にあったため「村山橋」と呼ばれていました。橋のそばには神社が祀られている小高い丘、金比羅山があり、現在の名前の由来となっています。

昔から交通の要所であった橋は、時代が変わっても多くの人に利用され続けています。いつも通る橋の名前に注目して、昔の砂川に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

更に詳しい地域の名前の成り立ちは以下の文献をご覧ください。
立川市内の図書館で閲覧可能です。

- 立川民俗の会 2010『立川民俗 第17号 砂川開拓開始400年記念号』
- 砂川町 1963『砂川の歴史』
- 立川市教育委員会 1978『立川変遷地図集』
- 立川市立第九小学校 1980『あしっこ 立川市立第九小学校創立記念誌』

現在の幸町辺りを「下宿」、「はけ」、「田掘」など、更に細かく呼ぶ地名もかつてあり、砂川ではそういった通称が多く存在しました。古い地名は文書に残らないものも多く、今後も多くの情報が必要です。市史編さん担当ではみなさんがご存じの情報や資料をお待ちしております。情報提供の案内は11ページをご覧ください。（山下）

部会特集 近代部会

砂川村の小学校 高等小学校開設まで

近代部会では、立川・砂川の両役場で作成された公文書を中心に調査を進めて骨子を組み立て、これに個人宅に伝来する史料調査の成果を加え、立川市の近代史を描く方針です。今号では、砂川地区を特集するにあたり、明治時代の小学校の場所や歴史、調査を進める中で見えてきた課題を紹介します。

明治初期の学校　現在、砂川地区にある小学校のうち、明治初期に前身が発足した小学校は、第八小・第九小・西砂小の３校です。

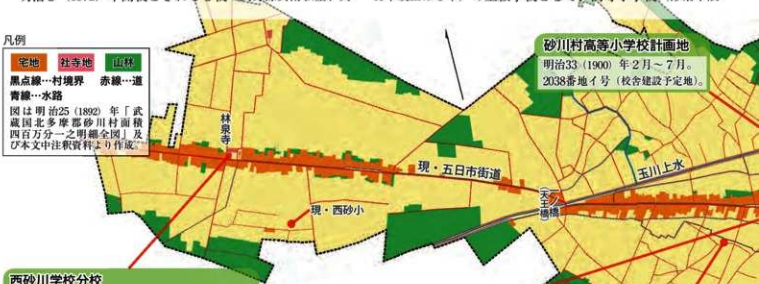
第八小は、中砂川尋常小（学区は五～七番組）と東砂川尋常小（学区は八～十番組・八軒）が明治33（1900）年７月に合併してできた「砂川尋常小学校」が前身です。中砂川尋常小は、明治５（1872）年６月に五番組の高野源兵衛宅に開かれた私塾、東砂川尋常小は明治５（1872）年５月に開かれた「共同学舎」がはじまりとされています（昭和５年『砂川尋常高等小学校概要』及び明治33年「小学校々数並位置更定之義稟中」東京都公文書館所蔵、624.D6.13（12））。

第九小は、明治５（1872）年に流泉寺境内に開かれたという「西砂川小学校」が、西砂小は、明治15（1882）年頃に林泉寺境内に設置された「西砂川学校分校（学区は中里・殿ヶ谷・宮沢新田）」が前身です（『立川市史』及び前掲「小学校々数並位置更定之義稟中」）。

明治５（1872）年開校とされる３校（高野源兵衛私塾、共同学舎、西砂川小学校）は、江戸時代以来の寺子屋・私塾と関係があると推測されますが、設立に関する同時代の史料は見つかっておらず、実態は分かっていません。初期の学校名についても、明治７（1884）年９月の史料には、「共同学舎」とともに「砂川学舎」という学校名が記されていますが、これが中砂川・西砂川どちらの学校のことであるのかなど、不明な点が残っています（明治７年「公用留」砂川村役場文書）。

過去の調査や書籍でも、明治初期の学校に関しては誤りと思われる記述や分からないことが多く残されています。今後、砂川村の旧役場文書や神奈川県の公文書、個人所蔵の史料などの探索・検討を重ねる必要があります。

高等小学校の設置　明治19（1886）年２月から昭和16（1941）年４月までの小学校令（第１～３次及び明治40年改正）では、義務教育の尋常小学校（第１～３次の修業年限は４年、明治40年改正は６年）の上級学校として、高等小学校（修業年限



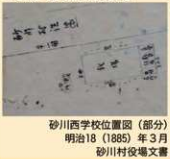
西砂川学校分校

明治15（1882）年ヵ～。3253番地。西砂川学校分校は、明治15年９月に砂川村西部に住む児童の通学の便を図るため、林泉寺境内に開設許可を得た。開校以前、西砂川の児童は三番組の西砂川学校まで通学する必要があり、設置申請書によると、通学距離は「40町（約4.36㎞）」あった。昭和42(1967)年４月、第九小から独立し、西砂小となった。

公立西砂川学校分校設置伺
明治15（1882）年９月
砂川村役場文書

西砂川小学校

明治５(1872)年２月～。308番地。流泉寺境内に開学。明治33(1900)年10月、高等科併置認可。



砂川西学校位置図（部分）
明治18（1885）年３月
砂川村役場文書

校舎新築移転

西砂川尋常高等小学校

明治33（1900）年11月～。1602～1607番地（設置当時）。現在の第九小。

は第1次が4年、第2次は2～4年、第3次は2年または4年、明治40年改正は2年）を設けることができる制度を定めていました。

砂川村では、第2次小学校令の施行準備中、明治24（1891）年8月頃から、議会で高等小学校の設置が検討され始めました。この時、西砂川尋常小を「砂川学校」と改称して高等科を併置する構想が生まれましたが、実現はしませんでした（明治23～25年「村会書類」砂川村役場文書）。

村内に高等小学校がなかった時期、砂川村の尋常小学校卒業者が進学をする場合、他地域の高等小学校に通学・留学する必要がありました。そのため、明治32（1899）年12月に府立第二中学校（現・都立立川高校）が隣村の立川村に開校することが決まり、中学校進学希望者の増加が見込まれるようになると、村内への高等小学校設置が急務となりました。

明治33（1900）年2月、砂川村議会は村中央部に「砂川村高等小学校」を設置することを決議し、3月には東京府の認可を得て、多額の寄付金も集められました。しかし、東西に広い砂川村では、高等小学校は西部・東部に各1校が必要とする意見も強く、5月には中砂川・東砂川尋常小を合併し、高等科を併置することが決められました。さらに、7月には「砂川村高等小学校」計画の取り止めが、9月には西砂川尋常小に高等科を併置することが決議されました。これにより、砂川村には2つの尋常高等小学校が設置されました。

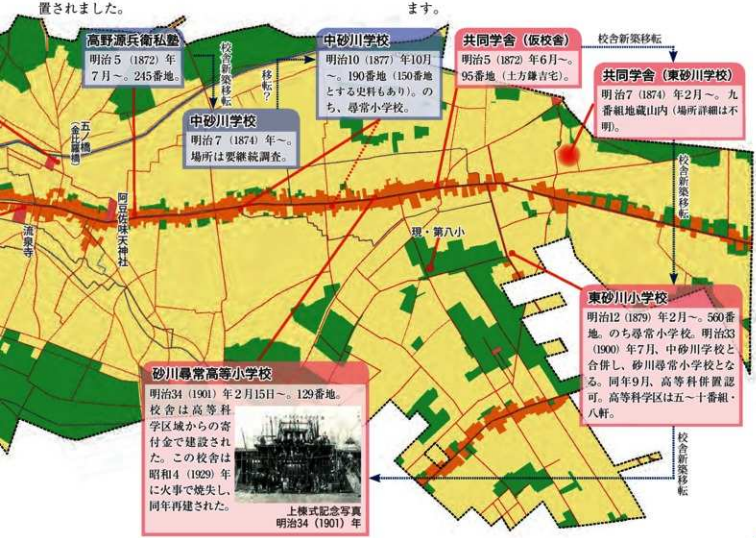
高等小学校の設置は、位置や数を巡った議論の中で、村長・収入役や複数の議員が辞職するなど、村内が大きく揺れた問題でした（明治33年「村会会議録」立川市役所所蔵）。

民間史料の中の小学校　明治期の小学校の建設費や維持費は、大半が保護者から集める授業料や住民からの寄付で賄われました。また、時期により役割・役職名は異なりますが、村内には学事を扱う代表人（学校世話役・学務委員・区会議員など）が任命されていました。そのため、個人宅に残されてきた史料の中からも、学校の運営に関する史料が見つかることがあります。

これまでの調査では、東砂川小学校に関する史料が多く見つかっています。学校資本金関係や公立として運営持続が困難となった際の私立学校建設構想、高等科併設の際の校舎建築寄付金簿、昭和4（1929）年に火事で焼失した校舎を再建した際の日誌などです。また、砂川村在住の人物が遠方に留学していた友人に宛てて、東砂川小学校や村の様子などを伝えた手紙も見つかっています。

一方、明治前期の中砂川・西砂川・西砂川分校については、史料が少なく、あまり多くのことは分かっていません。しかし、「分からないこと」を見つけ、調査対象を明確化することは、新たな調査に向けた第一歩でもあります。

学校に関する史料に限らず、資料編・通史編・テーマ編の刊行に向けて、今後もさまざまな史料調査を重ねていきます。



特に注記の無い限り、本稿で用いた史料・写真は立川市歴史民俗資料館所蔵。

「立川の史料を読む会」活動紹介

市史編さんと市民との協働作業

「立川の史料を読む会」[※i]は、市史編さん担当と市民の皆さんとの協働作業の場として発足しました。発足のきっかけは、市内で長きにわたって、古文書の解読や史料集の編さん活動をされてきた「公私日記研究会」[※ii]の方々に、市史編さん事業として、古文書解読を一緒に行うことについて呼びかけたことでした。

初めての試みであったため、会の運営や、解読する古文書の選定など、「公私日記研究会」の方々と相談しながら進めていきました。具体的な活動は、編さん事業の中で新たに存在が確認された古文書の中から、内容・分量共に市民の皆さんと解読することに適した古文書を選び、輪読会形式で進めることとしました。

この特集では、本会がこれまで行ってきた活動を振り返るとともに、参加者の皆さんの声を紹介します。

▲「立川の史料を読む会」活動のようす（平成28（2016）年撮影）

▼ 写真1a（綴じ位置右）
「鎮守諏訪宮造営中日記写」の表紙
（「鈴木家文書」立川市歴史民俗資料館所蔵）

▼ 写真1b
冒頭部分

平成28年度の活動

平成28年度の活動は、月２回・隔週金曜日の13時30分から15時30分まで、歴史民俗資料館の会議室で行いました。「公私日記研究会」からは14名の方々にご参加をいただき、市史編さん担当の専門嘱託と調査員が事務局として会の運営・進行にあたりました。第１回「立川の史料を読む会」は、５月20日に開催されました。

輪読した古文書は、柴崎村で江戸時代に村役人を務めた鈴木家に残された古文書[※iii]の中から、安政２（1855）年「鎮守諏訪宮造営中日記写」（横帳・全46丁、以下「日記」という）を選定しました（写真１a,b）。はじめに、日記１日分の記事を原則として１人分の解読・翻刻分量と決め、参加者一人一人に割り当てました。１回の会で解読を行う担当者は２～３人とし、各担当者には事前に割り当てた箇所の解読・翻刻を行ってきていただきました。

会の当日は、担当者が作成してきた翻刻文を音読し、合わせて内

▼ 写真2
「売リ渡シ申田畑手形之事」（「小川家文書」）

容の解説も行っていただきました。参加者は、担当者から配られる翻刻文と解説文に目を通しつつ音読される内容にも耳を傾けます。その後、みんなで話し合い、翻刻した文字に訂正が必要と思われる箇所があれば、直した上で日記翻刻文を仕上げていきました。

年度内での日記解読終了が危ぶまれた時期もありましたが、参加者皆さんの頑張りに助けられ、第19回目にあたる平成29年３月３日に無事読み終えることが出来ました。

結果として、右表のとおり全20回にわたる活動実績を積み上げ、日記の解読文は、市史編さん担当と参加者の皆さんとの協働作業によって完成した最初の貴重な成果物となりました。

平成28年度開催実績

回数	開催月日	会の内容	輪読担当者	参加人数
1	5月20日	担当による報告 ・日記輪読スタート	1	14
2	6月3日	日記輪読（2人担当）	2	12
3	6月17日	日記輪読（2人担当）	2	12
4	7月1日	日記輪読（2人担当）	2	11
5	7月15日	日記輪読（2人担当）	2	13
6	8月5日	日記輪読（2人担当）	2	10
7	8月19日	日記輪読（2人担当）	2	12
8	9月2日	日記輪読（2人担当）	2	13
9	9月16日	日記輪読（2人担当）	2	12
10	10月7日	日記輪読（2人担当）	2	13
11	10月21日	日記輪読（2人担当）	2	13
12	11月18日	日記輪読（2人担当）	2	14
13	12月2日	日記輪読（3人担当）	3	12
14	12月16日	日記輪読（3人担当）	3	12
15	1月6日	日記輪読（3人担当）	3	13
16	1月20日	日記輪読（3人担当）	3	13
17	2月3日	日記輪読（3人担当）	3	14
18	2月17日	日記輪読（3人担当）	3	11
19	3月3日	日記輪読（3人担当）→輪読終了	3	13
20	3月17日	担当による総括・来年度活動の説明	0	(13)

平成29年度の活動

２年目を迎えた今年度は、柴崎村で江戸時代初期に村役人を務めた小川家に残る古文書※iv を素材としました。今年度は前年度のように日記１冊を一年間かけて読み進める形をとらず、時代も内容も異なる史料計22点を１回の会につき１～２点解読することとしました。これは、協働作業の成果物が「資料編」の掲載に直結する形となることを企図しています。活動は月１回、毎月第３金曜日の13時30分から15時30分まで、参加者は、若干の変動はありましたが、前年度と同様14名となっております。前年度に読み進めた「日記」とは、史料の作成年代や性格、くずし字の字体などがかなり異なります（写真２）が、皆さん四苦八苦しながらも解読を進めています。一点一点が豊富な内容をもつ史料を丁寧に解読していくことで、江戸時代における柴崎村の様子が少しずつ明らかになることが期待されます。

ここまで駆け足でしたが、「立川の史料を読む会」の活動を紹介してきました。本会は、まだ発足して２年目を迎えたばかりで、事務局でも日々試行錯誤しながら運営しているのが正直なところです。

今後も会の方々に協力をいただき、立川に残る古文書の解読を少しずつ進めるとともに、よりよい協働作業のあり方を模索していきたいと思います。

▲「立川の史料を読む会」参加者の皆さんと一緒に

▲ 絵図に見入る参加者

※i　平成28年度当初は、解読する史料の性格等を考慮し、会の名称を「日記輪読会」としてスタートさせましたが、平成29年度からは日記以外の史料も幅広く読み進めていこうとの考え方に立ち、名称を「立川の史料を読む会」に変え、現在に至っています。本稿では、会の名称は原則として「立川の史料を読む会」と表記します。

※ii「公私日記研究会」は、昭和51（1976）年に会員13名で発足し現在も活動を続けている市民団体です。同会がこれまで残してきた成果物は、幕末に柴崎村の名主を務めた鈴木平九郎が書き留めた「公私日記」を全文翻刻した初版本（全20冊）と、同巻末に掲載された「公私日記研究（創刊号～12号）」、同日記の翻刻改訂版（全５巻）など多くあります。

※iii　鈴木家文書は、「立川市史資料集 第四集」で771点が目録化されており、その後５千点を超える新たな文書群が発見され（立川市歴史民俗資料館寄贈文書）、現在、市史編さん事業のひとつとして資料整理を進めています。今年度末には整理結果を「新編立川市史鈴木家文書調査報告書」として刊行する予定です。

※iv　小川家文書は、「立川市史資料集 第二集」に、25点の文書の目録と解説文が掲載されています。今回の市史編さん事業の調査の中で、同家の文書を借用し再整理したところ、既に掲載された文書の他にも新たな史料が発見され、現在計227点の文書が目録化されています。

参加者の声

毎回活発に意見を出し合い、文書解読に励む参加者の皆さん。立川市内だけでなく、市外から参加されている方もいらっしゃいます。「史料を読む会」に対する思いや意気込みなどをお聞きしました。

高橋 均さん
府中市在住

この会に参加して、「公私日記」以外の立川の史料も読む機会が増えました。古文書の学習を始め2年足らずですが、立川や周辺の往時の生活や時代背景も少しずつ理解出来る様になってきました。

下川 晃義さん
府中市在住

「公私日記」の研究会を機に出席することになりました。毎回苦戦していますが、前向きに立川の近世史への理解を深めたいと願っています。

甲斐 正昭さん
立川市在住

江戸時代の人々がどのような考え方をし、生活をしていたかを知りたくて「公私日記研究会」に入会し、1年3か月が経過しました。古文書の崩し字解読に四苦八苦しています。習うより慣れよ！

T さん
立川市外在住

これまで参加してきた勉強会では読んだ事のない文書を勉強出来るので楽しく参加しています。

永瀬 鉄男さん
小金井市在住

古文書を通して地方（じかた）の人々の暮らしや村の仕組みに関心を持ちました。当時の人々が手を染めた生の史料を眼前にすると、古文書学習の醍醐味を感じますね。

松田 説子さん
昭島市在住

今迄昭島市と立川市の文書を読み続けてきました。一番古い物で享保年間の文書でしたが、此処では現在近世初期寛文年間の文書を読ませて頂いており、次々と疑問が沸いてきて、謎解きを楽しんでいます。

松村 武夫さん
立川市在住

1971年、立川市への転居後まもなく、立川市の歴史を知らなくてはと思い、「公私日記研究会」へ入会。「公私日記」とそれに関連する史料を読み、今ではすっかり立川市民になっています。

増本 豊治さん
立川市外在住

古文書を勉強するようになって10年近くになりますが、「立川の史料を読む会」に参加して、1枚の古文書のバックにある歴史的背景を正確に把握する事が非常に大切であると痛感しました。

本江 俊美さん
飯能市在住

「公私日記研究会」に参加していて、その延長で参加させていただいております。立川市の歴史を知る貴重な会ですので楽しみにしております。

西村 達朗さん
国立市在住

昨年から当編さん事業の一環である「立川の史料を読む会」に参加、今後の調査・収集に依り新たな資料群の現出を期待しつつ、新史料の解読・分析作業に携わりそれらを通して微力ながらも編さん事業に貢献できれば無上の喜びである。

日野 さよ子さん
福生市在住

「公私日記」を通して、江戸後期の多摩の歴史を学んできました。この度は江戸時代初期の文書もあり、難しさの中に言葉は生きていることを実感しています。あとは砂川の文書が読めたらうれしいな。

吉村 健司さん
立川市在住

昨年は安政年間の諏訪神社建替の記録を読みました。「公私日記」と対照できて大変有意義でした。今年は小川家文書に取り組んでいます。近世初中期の柴崎村がどんな様子だったか、興味津々です。

平成29年４月～９月活動報告

月	日	活動内容
4月	9日	第１回・近代部会会議
	13日	現代部会聞取り調査
	21日	市民協働作業(立川の史料を読む会)
	29日	現代部会市内巡見
5月	19日	市民協働作業(立川の史料を読む会)
	28日	民俗・地誌部会柴崎町座談会
6月	1日	現代部会聞取り調査
	2日	先史部会古墳測量事前調査
	16日	市民協働作業(立川の史料を読む会)
	30日	中世・近世部会錦町蔵出し調査

月	日	活動内容
7月	2日	第１回・民俗・地誌部会会議
	16日	古代・中世部会市内石造物調査
	21日	市民協働作業(立川の史料を読む会)
	23日	第１回・近世部会会議
8月	1日	執務室の移転
	17日	第６回・立川市史編集委員会議
	18日	市民協働作業(立川の史料を読む会)
	27日	第２回・近代部会会議
	30日	第１回・古代・中世部会会議
9月	1日	第６回・立川市史編さん委員会会議
	12日	第１回・現代部会会議
	15日	市民協働作業(立川の史料を読む会)
	17日	第２回・近世部会会議

資料提供のお願い

古文書・絵図・地図・写真・地域の年中行事・信仰・考古資料などの情報をおよせください。

市史の編さんには、市民のみなさまのご協力が不可欠です。ご提供いただける資料やお聞かせいただけるお話がありましたら、市史編さん担当（電話042－506－0021）までご連絡ください。

［資料の例］

■文書、書類、印刷物
江戸時代から平成に至るまでのさまざまな古文書・書類・会誌・記念誌、チラシ・広告などの印刷物。

■絵図、地図類、写真映像、音声
土地の変遷や街並みのわかる絵図、地図類、景観や人の暮らしを写した写真や映像、音声など。

■地域の年中行事・信仰、ムラのつきあいや慣習など

■石器や土器など考古資料

お知らせ

平成29年８月１日から、立川市史編さんの執務場所は下記の住所に移転しました。

錦町３－５－22　YAZAWA DEUX Bldg. 201号

（旧ジプラルタ生命立川ビル）

《お詫びと訂正》

第３号「部会特集（現代部会）立川駅北東エリアを歩く」の一部に誤りがありました。お詫びいたしますとともに、以下のように訂正させていただきます。

６頁「５　栄緑地（旧引込線）」の項目

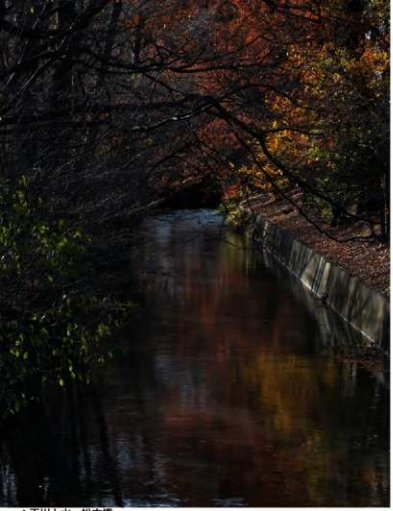
（誤）立川飛行場の建設とともに　→　（正）立川飛行場建設ののち

市史編さん広報紙 たちかわ物語 vol. 4

平成29(2017)年９月20日発行

発行　立川市産業文化スポーツ部地域文化課市史編さん担当
〒190-8666 東京都立川市泉町1156-9
TEL　(042)506-0021 ／ FAX (042)525-1601
E-mail　chiikibunka-t@city.tachikawa.lg.jp
URL　http://www.city.tachikawa.lg.jp/chiikibunka/sisi/hensanshitu/shishi_top.html
印刷　ぎょうせいデジタル株式会社

市史編さんHPはこちらからアクセスできます。



▲玉川上水　松中橋

▲砂川町7丁目

立川写真館

ふつうのすながわ

今回の写真館は砂川の日常風景を集めました。普段何気なく通り過ぎている人も、まだ一度も砂川を訪れたことがない人も、足を止めて素顔の砂川を味わってみてはいかがでしょうか。

撮影　伊藤風也　砂川在住

▲若葉町　鷹の道

▲金比羅山から見た富士山

▲南部公園

▲愛宕神社

▲西武立川駅